

はくさん

第5巻 第4号



白山比咩神社左義長

左義長は、ドンド焼、オンベ焼などとも呼ばれ、全国各地で古くより行なわれてきた私たちにとって親しみのある民俗行事です。この行事の由来については、さまざまな説がありますが、正月にやってこられて、各家庭に滞在されていた「お正月様（歳神様）」を左義長の火でお送りするというのが一般的な考え方のようです。「白山さん」で知られている白山比咩神社でも、1月14日の午前から、この行事が、小中学生を多く集めて神社境内の一画で盛大に行なわれました。お札や門松、注連縄それに学童たちが心をこめて書いた書き初めなどをうず高く積みあげた左義長に、神主の祝詞あと、生徒代表の火入れの式があり、火はいきおいよく天をこがしました。この日は古くより神社に伝わる護摩堂太鼓も奉納され、おごそかなうちにも、楽しい左義長の日が繰りひろげられました。

(高桑 守)

白山漢方医——石徹白 桜井吉兵衛の秘薬

吉 田 幸 平

1.

桜井吉兵衛家は、代々石徹白の漢方医で、針・灸も併せて行う世襲の家柄であり、慶長10年（1605年）の薬用書がある。

「慶長10年己酉外月28日

八婦国蘇呂王流眼目秘伝書」

室町時代の白山信仰の白山修験が盛んな時代には、登拝者に対する針灸や、治療も行い、また村の漢方医として生活していたことが伺える。白山薬草を使用した「秘伝書」には次の薬草が記されている。

黄蓮	かんぞ
芍薬	
木はだ	とうやく
もぐさ	につけ
桔梗	みょうばん（めあらいの木）
芥子	山人参
さくろ	胡瓜 あけびの実

以上の外

光明丹

滑石

生腦

燈心

があり、調合について、黄門障菝として、

○黄蓮 1朱 竜腦 1朱

●蛇骨 1朱 天石 2朱

貝鬚（かいご）1朱

天石 2朱

角石 1朱

等がある。特に「とうやく（胆葉）」は、大変苦い薬で、根から掘って採取し、陰干してから、薬研（やげん）で粉にして、煮る。それを山鳩の胃袋に詰めて、「熊の胆（くまのい）」と称して売っていたとのことである。

この熊の胆は、漢方薬の健胃剤として、好評のあったものの1つであることは人口に膾炙されていた。



せんぶり（とうやく）
Swertia japonica Makino

熊の胆の原料（とうやく）（『牧野新日本植物図鑑』
（石徹白村民の描いた絵）北隆館1961 495頁より）

2.

この桜井家は、宝暦4年(1754年)の石徹白騒動の追放100人衆の1人で、三島栄太郎著『濃北宝暦義民録』の「追放称宜跡式關所並若男女艱難の事」の条には、

松平右近将監殿へ杉本左近御駕籠訴の事
乍恐以書村奉願上候

金森兵部少輔殿御支配所

越前国大野郡石徹白 白山之神社

白川神祇伯殿御門人筋

神頭職

願人 杉本左近

桜井吉兵衛

御免地、石徹白社中家数 96 軒

人数 534 人

の中に、16番目に記されている。この宝暦騒動後、桜井姓を上村姓に故ありて改姓した家で、現在の上村昭和氏は上村を称して4代目という。1～3代目までは、白山中居神社の社家でもあり、式部の神祇官として、烏帽子着用のお墨付があるのを見ると、代々石徹白白山中居神社の式部として奉仕した家であり、また石徹白中在所の威徳寺の檀家としても大きな存在であった。

また、釈巖如として門跡の親筆文書もある処から、神仏ともに習合的な石徹白の信仰形態はそのまゝ上村家でも守られてきているのである。

3.

上村昭和氏の先代上村茂左衛門は、漢方医として、また売薬売りとして、行商を行っており、可成りの収入があったが、その収益は、穴馬に愛妾を持ち子供を持つまでになり、留守宅は大家族がいたという。売薬の行商と、病弱者には針・灸を奉仕していったが、これ

らは白山御師として牛王札と共に檀那場を併せ持った遊行的背景があり、白山御師としての主従の二役の存在であった。石徹白の中在所にも同じく上村五兵衛が明治一大正時代に御師として、また秘薬を作る漢方医でもあった。「白山薬草」というのは、石徹白御師の牛王札と共に売薬されていったことをいうのである。

4.

石徹白御師(おし)は、石徹白の村内では、社家が全村民であったという特意的な、白山信仰の免除地であり、神主や神頭職からは低い地位で、半農半社家的存在でもあった。

しかしながら、檀那場(霞ともいう)の主として武蔵・相州・駿河・伊豆・遠江・三河・尾張・信州・飛騨・美濃に出掛けた時は、白山様の到来であり、高く評価を受けていたのである。そして、白山講を組織し、雪解を待って帰村する時には、金子50両と米50俵という収益であり、冥加金を神頭職に納入していたが、これは大きな経済力を持っていたのである。

特に上村茂左衛門(桜井吉兵衛)や上村五兵衛は、御師として漢方医としてでなく、獣医としても活躍し、厩祈禱の外、馬の充血した馬の血を抜く、獣医としての業も行い、馬主はその御礼に、屋敷へ来て労力奉仕をし、石垣積みの洪水予防垣を労力支払で行われた。

富山の売薬行商の起縁が立山御師であったというが、石徹白御師は、売薬業を兼業とし、主として、祈禱や白山講組織等の方面に重点がおかれた様である。〈中部女子短大教授〉

(注 本文中のとうやくの図で村民の描いたものについては、その植物名がわかり次第、普及誌上でお知らせします。)
〈中部女子短大教授〉

尾口村の若者組

——手取川周辺のムラを中心として——

今村 充夫

白山麓の民俗調査や交渉のため、近年手取川に沿いのぼり、白峰村・尾口村へ行くことが年間何回ずつかあった。その途中、舗装整備された道路と次第に奥まってゆく山やムラ、のたたずまいの美しさに目を移すのであった。

木滑辺で尾添川とわかれ、手取川本流だけが頼りのような路程の間、急に自然を機械によってこねまわしたような地表の荒れがひろがる。女原から東二口へ向かう坂、そこも何度か登った所だが山腹を削り取って新たにつけたかにさえ遠目には見えた。

そこからはまったく無言で目を見張るだけ、山容は一変し、それも来るごとに大きく変わった時期があったし、かつての五味島・釜谷はムラの一部さえなく、かわりに新建材の飯場が密集し、かろうじてバス停だけが撤去されないままで見過された。深瀬はまだ残った家屋がいくつかあった。上流の白峰村桑島もそうした運命を待っていた。ダムの上にかかった巨大な橋ははじめ柿色のさび止めの塗装から、後には灰色の本塗りにかわった。

手取川のダムは国の大事業として工事は着々と進捗した。それと引き替えにいくつかのムラは解体され、その位置は永久に人工湖底に沈もうとしていた。何百年以前、いやもっと以前から営まれてきたムラの人と生活は移住することにより、実体は一応残らなくなった。ただ文化遺産としての顕著なものは再現されようとしている。それは深瀬の「でくまわし」あるいは、檜笠製造の技術伝承である。これらはどうしても存続してほしいものである。

ところで、ムラの平常的な生活伝承は環境が変れば早急に変わらざるを得ないものである。ことにムラ構成の習俗は、ムラの解体と

同時に失われた。しかし失われる前にせめて記録にとめたいという念願が持ちあがっていた。それが石川県立郷土資料館の昭和46年以來の「民俗資料緊急調査報告」であり、現在編集中の尾口村の「尾口村史」であろう。

筆者は右の両調査に関係をもちつつ調査結果を報告した。だがそれらに掲載できなかった部分を少し集めてみたので、それを紹介することにした。なおダム造成によりあるいは影響によって離散した尾口村の五味島・釜谷・深瀬・鶉ヶ谷の4ムラの若者組資料に限定した。

(1) 五味島の若者組

若者組は通称ワカイシュウであり、文書類では若連中と書いてあった。後に青年団に改組した。

若連中の加入は小学校卒業直後で、脱退の時期は結婚した時点であった。加入の申し込みの際、酒を持参した。若者頭が統制していたが、家柄と年長者ということで選出されていた。新参加者はツカイバシリとなり、次期の新入者のあるまで勤めさせられる慣例であった。

若連中の行事を列挙すると、1.盆祭りの世話、9月13日の宵盆に旗等起こし、踊り場の準備に太鼓を出し提灯を吊る。14~16日踊りの世話。2.豊楽相撲開催、9月12~13日、土俵作り、14か15日を選定、白山麓の諸村に案内し、経費はムラ全戸からハナを、業者からも寄付金を集めた。3.ムラの道路補修に参加、9月17日晚、精算をなし、飲酒をしたが、肴を用意してくれる家もあった。18日はモライボンとして区長から休日の許可があった。4.ヨビシというのは8月16日他村に出ている者が戻り、これを招待し膳部を出した。接待に娘たちを頼み、包銭の礼をした。5.ヤドの

生活があり、パンパでパンモチをした。14～20貫の石4個があって力を競べた。米5斗俵は16貫あったから、これをおかつぐための練習であった。

(2) 釜谷の若者組

通称ワカিশユであった。加入は以前18歳、後に15～16歳で、適齢の者に「われも入ったらどうや」という勧誘を受けた。けれども体が大きいとか才智があるので年が若くても加入できた者もいた。その時期は3月か12月であった。若者頭が統率し、新参者はツカイバシリをした。

若衆の事業は、1.祭りの旗起こし、太鼓を出し、提灯を吊る。2.盆踊りの準備、9月7～9日まで、世話をした。以前ジョウカベを踊り、深瀬・五味島からも参加した。3.芝相撲を主催、土俵造り、賞品の用意をした。瀬戸・尾添・桑島・白峰からも見物にきた。4.杉藪を共有財産とし3反歩あった。5.歳の暮れには経費精算のためポッカをしてやり繰りした。6.ワカイモンヤドは3か所あり、新世帯を借り、6～7人寄った。冬12月から翌年4月まで藁仕事をし、ワラジ・コンズケ・ニンナワ等を製し、カクセツをして飲酒、山祭りにはソバ粉を挽き食した。パンモチもした。15貫ほどの石をおかついだ。

(3) 深瀬の若者組

深瀬でも若者組は通称ワカিশユ、文書では若連中であった。明治43年青年団に改組した。

加入は小学卒業後1年、15歳になり、1人前の扱いを受けるようになり、加入した。4月3日の総会に「今年から青年団になるのやぞ」と自覚を促されて入団、21歳軍隊に入隊し退団となった。

青年団の役員は団長1名、副団長1名、評議員6～8名、幹事3名であった。

ワカিশユの仕事は、1.4月の祭り、9月の盆祭りに、旗竿起こし、春秋に踊りがあるので世話をし、照明の蠟燭・酒代などは割勘が基本であった。2.相撲は9月9日で勸進元を勤め、ハナを集めたが、不足額は割勘で支払った。3.12月から1月にかけてツトメ講を15～20日間開いた。毎夜9～12時まで、師匠

を招いた。4.デクマワシの練習は、2月7～17日まで、毎夜けい古した。本番は2月15～17日の3日間の夜で、大人も間に入って演じた。これがムラの大きな楽しい行事であった。

ワカিশユヤドの生活は明治時代から昭和10年まで続いて営まれたという。もっと古くからあったと想像される。若衆は総勢30～40人であり、4～5人ずつ分かれるから、6～8組のヤドがあった。大体、老人のおらない新世帯の家が選ばれた。ヤド別に頭がおり、新参者がコバシリ役をした。冬12月から3月までの期間、しごと始めには、各ヤドでザツケといって手料理で「しごとやるまいか」と元気を付けあった。しごとは笠作りであった。3月末には別れのカクセツをした。1月5日と12日には魚を買い、野菜は持ち寄りでカクセツをし、この時はヤドの人を招待した。経費は割勘であった。3月初午にも同様のカクセツをした。それがヤドへのお礼になった。時には兎を捕えてカクセツをした。

(4) 鶉ヶ谷の若者組

通称ワカিশユといい、若連中と書いた。青年会といったこともあった。大正末期青年団に移行した。

ワカিশユの加入は、15歳で、30歳で退団した。9月13日の盆の寄り合いに加入した。ムラの外からの加入者は酒を出した。会長・役員選出は4月25日の祭りの頃で、会長1名、役員5名であった。新参者はハシリヅカイをした。

ワカিশユの事業は、1.植林、9月盆すぎに下蒞りをした。2.宮の世話、祭りの旗起こしその他、春祭りは5月2～7日であった。3.盆踊りの世話、9月8～11日の4日間。4.花相撲の世話、9月の盆に行った。

ヤドの生活は、5～6人で組をなし、3～4組に分かれた。若者頭のいる所が本部になった。老人不在、親戚関係の家が選ばれた。藁仕事をし、カクセツは5月に1回、正月3日にヨアカシをし、酒を飲んだ。夜明け前に太鼓をたたき、人を起こした。パンモチ石の練習は道場の広場でした。

〈石川県立郷土資料館副館長〉

稗飯と栗餅の暮し

——白山麓尾口村の食生活資料断片——

小林 忠雄

数年前に尾口村東二口の表しのさん（明治25年生）という古老から稗・粟・山菜など山に住む人々の食生活について興味深いお話をうかがったことがある。

東二口は牛首谷の入口付近にある戸数22戸の小村であるが藩政期には120戸を数えた尾口村でも最も大きなムラであった。

明治29年に北海道へ57戸の集団移住があり、富山県の伏木港より僅かな家財道具をもって出向いたといわれ、何人かが暮していけずにまい戻ったと伝えられる。

東二口はかなり古くから炭焼きのムラとして知られ、昭和10年頃37戸のうち20戸の家で炭が焼かれたという。また木挽きも同じ頃9人おり、山樵業の盛んなムラであるといえる。木挽きや炭焼きはかなりの重労働であり、それらが食う1回の飯の量にて「ヒヨヒヨ5合、炭焼き3合」といわれるほどであった。

その他養蚕なども行われたが、生業の中心は常食である稗・粟・大豆などの雑穀農耕である。東二口の場合昭和25年頃まで道場の2軒を除く全戸が季節出作りに従事していた。ムラには僅かに水田があるがほとんどとるに足らないものである。

稗は往時から4種類が作られた。最も普通にはカマシ（鴨足）と称されるシコクビエで、その他この土地の名でクロチッコ、シロチッコ、コウボウビエと呼称されるものがある。

クロチッコは収穫時期が秋の終りで最も遅く、また比較的山の高地では適さず実がつかないといわれるが、収穫量はすこぶる多い。

シロチッコは収穫時期が早く、また実が白いので稗飯にして米と混ぜて炊いても余り目

だたず、白い稗飯として重宝がられた。これはいつ頃かは不明だが、東二口には牛首村の三郎兵衛なる者が持ってきたと伝えられ、サボビエとも称され最近まで作られた品種である。

コウボウビエはその名の通り、その昔、東二口に大風が吹いて穀物が穫れずに飢饉の年があった。ムラ人が泣き暮しているところへ弘法大師様が通りかかって、このムラ人の難儀をみかね、背の低い風で倒れることのない稗の種をおいていったという。

これは味もしなやかでやわこく（柔らかく）糠も食されることから、ムラの中でも貧乏な家で多く作られたといわれている。弘法稗の名も伝説とは別に貧者を救うところからついた名称であるかもしれない。このような稗はその穂を蒸らしてツボにしたものを鍋で煎り、ヒエウスで殻をひきわり白くした後、トウミで殻と実を選別し、さらにヒエドオンで二度振って粗い実と細かい実に分けて食される。明治末期頃ではムラのオヤケ衆（地主層）は米5合に稗1升の比で炊かれ、その他は米3合に稗1升の割合で稗飯が食された。

また稗飯はほとんどが鉄鍋で炊かれ、ナベには8升炊きの1番鍋をはじめ、5升炊きの2番鍋、2升、1升5合、1升、8合、5合炊きというように容量の異なる鍋が使われていた。稗飯の炊飯には白峰村ではゴロギアと称される長いシャモジ様の混ぜ棒が使われるが、尾口村では、一般にオダイバシという木製あるいは竹製の長い箸が使われる。すなわち、鍋に米と稗を前記のような比率で混

ぜたものに水を入れ、ジロ（田炉裏）の火にかけ時々オダイバシでかきまぜたり、鍋底にこびりつくのをおこしながら炊くものだが、後には白峰のゴロギアに似たメシガエという道具が使われるようになったといわれる。

オダイバシは杵や櫓材が多く使われるが、なかでもウツギ材のものは体に薬になるといって珍重された。

粟も薙畑で栽培される代表的な穀物だが、多くは粟餅にして食される。東二口では5種類の粟が作られ、なかでもモチアワと称されるものが多い。このモチアワと同系統の品種にキネつり、ムコダマンと呼称されるものがある。特にムコダマンは実の色が白くて味も良く、昔、某家の髯さんが嫁の実家に招かれて粟餅をごちそうになり、その餅があまりに白いので米の餅と間違え、腹いっぱい食べて喜んで帰っていったという話からこの粟の名がつけられたと伝えている。

またママアワという粟があり、これは味は悪く、収穫時期も遅いが、多量に穫れる品種であるという。別名にウルカナとも称され、穂先が短かく固い実をつけるところからカナヅチ（金槌）ともいわれる。

この種と同系統のものにネコアシと称されるものがあり、これは穂が猫の足のように4つまたの形態をとるところからその名がある。

以上のように稗・粟がいくつかの種類をともなって耕作され、山の人々はその種の1つ1つの性格をとらえながら伝承している点に驚かされるが、特にコウボウビエ、ムコダマンのように伝説が付加された稗・粟には山の穀物文化の根の奥深さを物語ると同時に、伝承性とは一体何を伝え、何を意味する常民の生活手段なのであろうかという疑問を改めて考えさせられる。

〈石川県立郷土資料館学芸員〉

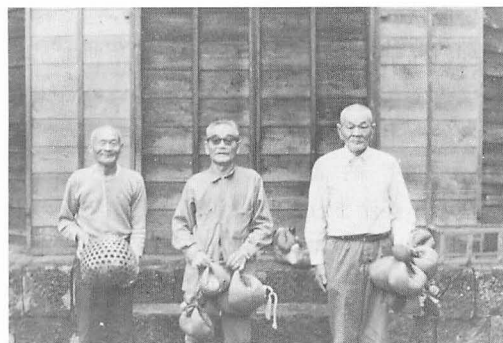
白山麓のホーカについて

山本重孝

はじめに

昭和51年6月26日、日本モンキーセンターの広瀬鎮氏、白山自然保護センターの水野昭憲氏、白山ろく少年自然の家の真野哲三氏と共に大日川上流の猿についての伝承聞取調査をした。小松市杖（大日川ダムのため廃村）出身の岩本直太さんから祭礼の流し旗の裾に下げるククリザルの話が出た。翌日鳥越村左礫では武建社に保管されている沢山のサルボボが見られた（写真I）。広瀬氏の示唆により秋祭りの時、白山麓の村々の実際を調べようということになった。9月14日には真野氏と白峰・尾口村の神社を、16日には水野氏と鳥越・河内村の神社を一巡した。天候が悪く流し旗の掲げられていたのは鳥越村上野の

ものだけであった。これを土台として、その後見聞した白山麓5ヶ村の全部落の神社とホーカのかゝわりをまとめた。



左礫武建社のサルボボ（写真I）

1. ホーカについて

1 名称

「はじめに」の中に出てくるように、色々の異名があつてとまどう位である。サル、サルメ、サルコ、サルカケ、サルボボ、ヒィヒィ、ニンギョー、ネンネとあるがホーカと呼ぶ所が一番多いので題目・項目をホーカとして記述を進めたい。

2 形態

赤い一枚の布で胴体と4脚を作り、頭部は白布で顔をぬい、目鼻口を描き、頭に黒い烏帽子をかぶせて作った人形の様な形をしたものである。20 mもある大旗棒から16 mの大流し旗を吊し、これにホーカの4脚をくくり宙吊りにする。7 cmの少ないものから内尾の様に70 cmもあるものもある(写真II)。

3 使用目的

○おもり

旗の裾に何もつけないでおくと、一寸した風が吹いてもすぐ舞い上って面白くない。ホーカとガランガラン(竹籠に鈴を入れたもの)をさげると丁度よいおもりになる。

○かざり

イ. 大中小のホーカを上から順に3~5ヶ組合せてさげる(市原、吉野、瀬波、瀬戸、広瀬)。

ロ. ホーカと一緒に三角形のもの(尾添一ホーカ、中宮一ヒグチ)をさげる。

○お祝い

女の子の出産祝いや、初老の祝いに奉納する(瀬戸)。

○厄払い

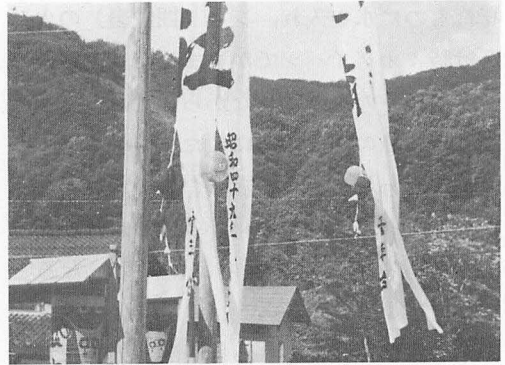
裸の赤子を宙吊りにして、厄神や悪魔がくればこんな目にあはずぞ……厄払いの意味もある(板尾・広瀬・瀬戸)。

4 奉納者

女の子が産まれた時母親がまた、年頃の娘さんがよい婿さんが得られるように願いをこめて奉納したものだが最近では呉服屋や旗屋に作って貰ったものが多い。

5 さげなくなった理由

風が吹くと木の枝や電線にひっかゝって、



内尾の大ホカポー(写真II)

それをとるためにほとんど困った。また、奉納するならわしがすたれたことのために段々さげられなくなった。

2. 白峰村とホーカ

9月14日風嵐の岩根神社に行った。氏子惣代の息子さんに聞くと、それはサルメというもので、現在でもさげている。サルメというのはサルのことで、この地方ではへびのことをへびメというように名詞の下にメをつけるならわしなのでサルメというのだということであった。白峰の八坂神社では真新しいものが干してあった。帽子が烏帽子のものと普通のものとの2種あった。紙谷宮司の話ではこれはサルと言うものであるが、どんな意味をもつものかわからない。昔からさげているので旗を新調した時これも新調したとのことであった。桑島では東鳥神社の隣の竹内仁三郎氏御夫妻から、ここではヒィヒィというもので前にはさげていたが木の枝にひっかかって困りさげなくなったということであった。隣部落を3ヶ所歩いて、それぞれ呼び名が違うので大変興味深く、他村をしらべるよい刺激となった。

3. 尾口村とホーカ

尾添の加宝神社に入って見た。拝殿の窓側に底辺25 cm位の二等辺三角形の綿の入った美しいものが4つかけられていた。丸尾源治氏宅に行き母堂ののぶさんから話を聞いた。尾添では4脚をくくったものとの三角のものを共にホーカと呼び、流し旗の裾にさげる。

これは色・柄・模様は自由で美しい布で作って神様の御馳走として、年頃の娘さんが奉納するとの事であった。瀬戸ではサルコといって幾つものサルコがさげられる。女の子が生まれた時、男の初老の祝の時奉納されるものと中田由三氏から聞いた。尾添ではかざり、瀬戸ではお祝い厄払いの意味が多いようである。

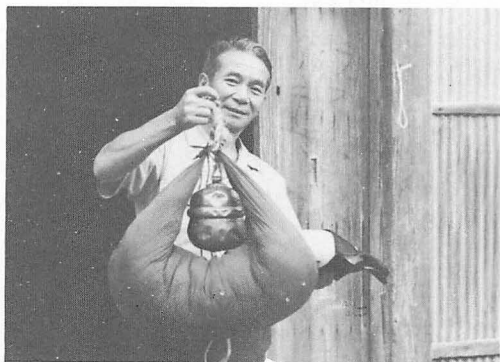
4. 鳥越村とホーカ

左礫では10ヶ以上のサルボボが保管されていた。若い娘さん達が心を込めて縫ったものである。杉森では真新しい旗とホーカがクラブに干してあった。篤志家(板倉忠雄氏)が金沢の旗屋に注文して作らしたものである。釜清水では娘さん達がホーカと共に絵馬などの額受けなど作るならわしであった。ホーカの綿はゼンマイの綿が使われた。上野ではガランガランはなくホーカだけさげられていた(写真III)。広瀬では大小のホーカを幾つも組合せてさげる。さげる理由はおもり、かざりが大部分で魔除けの意味もあるのではなからうかという人もあったが、はっきりしなかった。

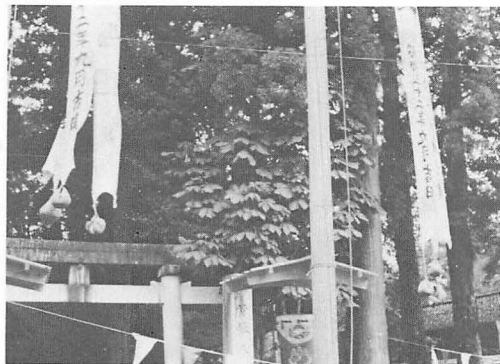
5. 吉野谷村とホーカ

中宮では尾添と同じくホーカと共に三角形のものをさげる。ここではヒグチ(火うち石に似ている)と呼んでいる。市原ではサルコと呼び大中小と5ヶ位順に下げる。吉野ではサルカケという。

年頃の娘さんが奉納したものだが、今はそ



鳥越村上野のホーカ(写真III)



瀬波神社のサルカケ(写真IV)

のならわしがすたれて、旗を新調する時業者に作って貰う(瀬波区)(写真IV)。

6. 河内村とホーカ

河内村ではホーカ、サルコ、ニンギョウ、ホカポーの名で呼ばれている。現在さげているのは内尾と江津の2部落である。内尾のものは特大で70cmもあるのにびっくりした。名の起りやさげるわけを聞いてもはっきりした答が出て来ない。幸い河内村の前教育長上山秀之氏が板尾の方なのでホーカについての卓見を承ることが出来た。ホーカは法化で、魔除け人形のことである。

祭礼の流し旗のおもりに吊りさげたもので悪魔が村に入り込まないように願ったもので、赤子の裸姿を吊りさげた姿には悪魔も恐れて逃げだすという意味を持っているとのことであった。

む す び

白山麓5ヶ村の全部落の神社とホーカとのかかわりを一通り調べることが出来た。一覧表の協力者と書いた方々からは色々便宜をはかって頂いたり教えて頂いたりしたので厚く御礼申し上げます。

この調査を始めるにあたってホーカの起源(サルとのかゝりやホーカの語源)をはっきりさせたい、白山麓独特のものがないか(白山信仰との関係)をさぐりたい、と思っていたが、殆んどははっきり出来なかった。次の機会にはこの点に視点をしぼって念の入った聞きとりをしたい。

〈吉野谷村文化財保護委員〉

山日記

☆昨年一年間の白山での一番の出来事は、なんといっても白山林道の開通です。昨年8月26日から70日ほどの間に、約9万台の車が林道を通過したそうです。自然保護センターの来館者数もびっくりするほどふえています。昨年の来館者総数は5万1千人で、10月だけでも2万3千人の人が押し寄せました。これまでは一年間の来館者総数が1万7千人ですから、そのすごさが想像できると思います。来館する人たちの様子も変わってきたようです。どちらかというと、これまではセンターで何かを知りたい、学びたい、勉強したいといったような気持ちの人たちが、多かったと思われます。ところが開通後は、林道の物見遊山が目的で、センターは手洗のある場所と割り切っている人たちが、ふえているのではないかと感じられます。そういう人たちにこそ、展示や映画を見てもらって、自然のしくみや人間と自然のかかわりあいに興味を持ってもらいたいと願っているのです。

けれどもガイドコーナーと手洗を往復するだけで、こちらの思いどおりには、なかなか動いてもらえません。それから、来館者の年齢構成も変わって来ているようです。これまでは学校の生徒さんや中宮温泉へいらっしやるお年寄が多かったのですが、最近では社会の中心となって働いておられる30代から50代の男の方がふえてきました。また、センターには縁遠かった20代の若いグループの一行もふえているようです。中宮温泉も山の中の温泉といった風情からはほど遠くなり、以前の情趣を懐かしむ人もいます。とにかく白山林道の開通で、良い悪いは別として、センター周辺には大きな変化があらわれています。

☆毎年3月上旬の今頃になると、その年の白山でのいろいろな登山施設の整備や修繕の準備にとりかかります。前の年の秋に手分して白山に登り、山小屋や登山道や案内板をひとつおり点検します。そして、利用者のために必要な施設や修繕箇所を記録しておきます。それをもとにして、その年はどこで、どんな工事をするのか決めて、夏山のシーズンに間に合うように工事の設計にとりかかります。しかし、冬の間には雪の重さで押しつぶされたり、春先の雪崩で飛ばされたりして、雪が融けてみたら、秋には確かにあったものがなくなっていたりすることもあります。

また白山では、屋内の工事は別として、登山道などでは7月の中旬まで雪が残り、工事を思うように進めることが出来ません。このように白山での工事では、平地ではちょっと考えもつかないような困難によく出会います。ところで、白山の室堂や南竜ヶ馬場での工事では、セメントや砂利や食料などのすべての資材をヘリコプターで空輸し、運びあげなければなりません。そのうえ作業をする標高が高いために、空気が希はくでするので、平地のように能率よく作業をすることが出来ません。また実際の作業をする方たちは、何日も山に泊り込んで不自由な生活に耐えなければなりません。遊びで山に登ることは、とても楽しいことですが、仕事で山に登ることは、とても厳しく、辛く、苦しいことです。このようなことがいろいろ重なって、白山での工事の費用は、平地でするとくらべ数倍にもなってしまいます。皆さんが白山で利用している登山施設は、何んでもないように見えても、とても高価なものなのです。

〈自然保護課〉

たより

3月の声をきくと、さすが春めいた雰囲気、ここ山里にも感じられます。今年は、昨年に較べて、降雪も少なかったのですが、それでも、多い時で1m 50cm位の積雪があり、職員も、庁舎の屋根の雪降しに一日忙殺されました。本年度を振り返ってみれば、何んといっても、夏の白山林道(スーパー林道)オープンが、最大の出来事でしょうが、次年度からは、今年度に出てきたさまざまな問題や矛盾を踏えて、よりよい環境保全への道を、より一層、積極的に探っていかなければならないでしょう。その意味でも、皆様の御意見を多くお聞かせ願いたいと思っています。

ところで、私たちの夏の庁舎、中宮センターが、2月1日に、アワ(乾雪表層雪崩)の直撃を受け、大きな被害を出しました。たまたま、NHKと日本テレビの取材班が、サル取材のため、センターに入っていたのですが、幸い人の被害はありませんでした。しかしながら、皆様におなじみの展示室、レクチャーホールなどは、雪崩に伴う風圧で、天井ははがれ、ドアは破られ、展示標本なども吹き飛ばされ、床には雪が1m近くも積っている状態です。雪解けをまって、復旧作業にかかるわけですが、職員一同、大きなショックをうけています。とにかく、すみやかに復旧して、皆様にお見かけする日を一日でもはやくするよう努力しています。

目 次

特集 白山麓の暮しと民俗

白山比咩神社左義長.....	高桑 守	1
白山漢方医一石徹白 桜井吉兵衛の秘薬.....	吉田 幸平	2
尾口村の若者組.....	今村 充夫	4
稗飯と粟餅の暮し.....	小林 忠雄	6
白山麓のホーカについて.....	山本 重孝	7
山 日 記	自然保護課	11

はくさん 第5巻 第4号

発行日 1978年3月20日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村市原
印刷所 株式会社 橋本 確文堂